

## 相互支援型交流システムを用いた離島校と大学間の交流促進方策に関する研究（2）

園屋 高 志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕・河 原 尚 武〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕  
植 村 哲 郎〔鹿児島大学教育学部(数学教育)〕・関 山 徹〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

### Research on the Promotion of the Exchange Study between College and Schools in Isolated Islands (2)

SONOYA Takashi・KAWAHARA Naotake・UEMURA Tetsuro・SEKIYAMA Toru

キーワード：離島、テレビ会議システム、交流促進方策、遠隔教育、大学教育

#### 1 はじめに

##### 1-1 これまでの研究経過

筆者らはこれまでに、鹿児島大学教育学部と鹿児島県内離島の学校（以下「離島校」）をインターネット及びテレビ会議システムで結んで、相互に支援する交流システムを構築してきた。そしてこの「相互支援型交流システム」（以下「本システム」）を用いて、①離島校の教員と教育学部の学生との交流、②離島校の児童と大学教員との交流、③授業実践に関する教員研修等を行い、その効果を明らかにしてきた（園屋ほか2004、2007、2008）。

本システムを必要とする背景はこれまでも述べている通りであるが、読者の理解のために、改めて以下に述べる。

周知のように鹿児島県内は離島が多いという地理的特徴があるが、離島校においては、教育実践に必要な情報を即時に入手することが困難というハンディがある。特に、教員が大学等に来て専門的な情報を得たり、相談したりする機会を作ることが日常的には不可能である。

一方、鹿児島県の教員は離島に赴任することが義務づけられているが、教員養成段階（学生時代）において、離島の教育を体験することはほとんどできない。

そこで、筆者らはこれら両者のハンディを補うため、図1（次頁）に示したように、鹿児島大学教育学部と鹿児島県内離島校をインターネット及びテレビ会議システムで結んで、相互に支援し、情報交換を行う交流システムを構築するに至った

ものである。さらに本システムにおいては、大学側は同図に示したように、離島校と専門機関（博物館・歴史資料館等）との間の交流学习、あるいは離島校間の交流学习を仲介したり支援したりする役割も担っている。

##### 1-2 本研究の目的

これまでに筆者らは本システムを用いて、前述の交流学习を行ってきた。また、筆者らは、交流する際の、教育的意義、実践事例、機器の設定、交流方法等をまとめた「活用マニュアル」を作成している（園屋ほか2006）。

しかし、実際に学校現場を訪れ教員と話をしてみると、交流の教育的必要性そのものが理解されていなかったり、テレビ会議システム利用への不安があったりするなど、テレビ会議システムの活用意欲を阻害する要因があることがわかっている。

また、寺嶋（2007）らの調査によれば、へき地・離島地区の教員の方が、都市部の教員よりも、テレビ会議システムについて肯定的な評価をし、利用に期待を寄せていることが明らかになっている（寺嶋ほか 2007）。

本研究の目的は、上述のことをもとにして、本システムを利用した交流促進の方策を立案することである。前論文（園屋ほか2008）では、交流促進方策のうち、離島における「出前形式のICT活用講座」の実施結果を述べ、それにもとづく「離島におけるICT活用の要因」の分析結果を明らかにした。また「離島校の教員と教育学部の学生との交流」の実践結果についても述べた。

1-3 交流促進の方策

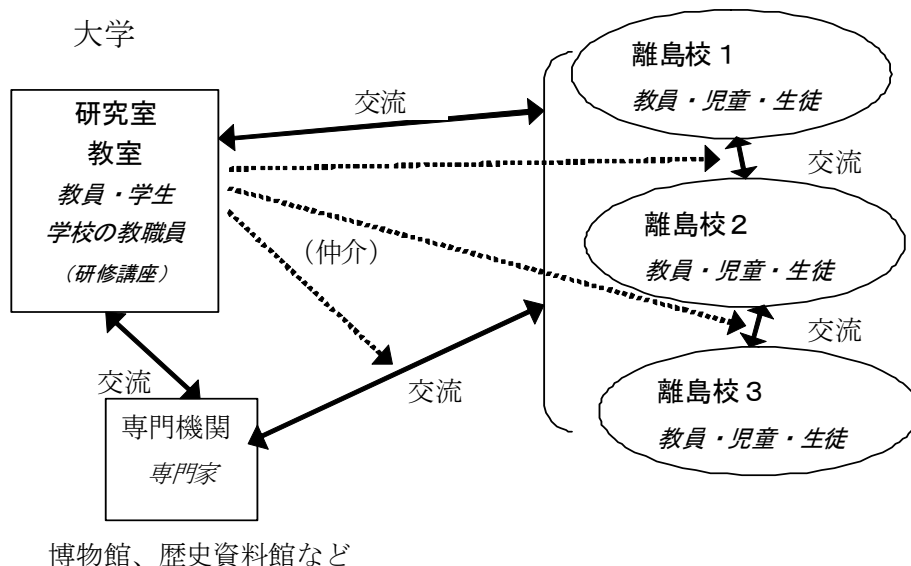


図1 相互支援型交流システム

本論文では、大学と離島校の交流のうち、これまで述べていなかった二つの形態の交流学习の実践結果について述べる。さらにこれまでの研究で明らかにした交流促進の方策を、研究のまとめとして述べる。

2 交流相手による交流形態の分類

筆者らがこれまで行ってきた交流学习の形態を、交流相手によって分類すると、表1のようになる。

表1：交流形態の分類（交流相手による分類）

|                   | 離島校側 | 教職員 | 児童・生徒 |
|-------------------|------|-----|-------|
| 大学側               |      |     |       |
| 大学教員              |      | A   | D     |
| 学生                |      | B   | E     |
| 学校の教職員<br>(研修講座等) |      | C   | F     |

この表は、交流する相手が大学側、離島校側のそれぞれだれであるかによって、交流形態を分類したものである。このうち大学側に「学校の教職員（研修講座等）」とあるのは、大学で行われる

教職員対象の研修講座や講習等で本システムを用いて交流する形態を指している。

同表に示したように、A～Fの6つの形態があり得るが、これらのうち、既に実践結果を明らかにしたものは、A、B、Dである。すなわちそれぞれテレビ会議を通して、Aは校内での教員研修の際に大学教員が対話しながら参加する形態、Bは大学の授業で学生と離島校教員が対話する形態、Dは大学教員が離島校の授業に参加して専門的な話題を提供する形態、である。

本論文では、表1のうちこれまで述べていなかった、CとEの交流形態についてその実践結果を述べ、その効果について考察する。そして、最後に研究全体のまとめを述べることにする。

3 研修講座における離島校との交流学习

本章では表1の交流形態のうち、Cについて述べる。すなわち大学での教職員対象の研修講座等において、本システムを通して離島校の教職員と交流するという形態である。

3-1 交流学习の概要

(1) 交流学习を行った研修講座と受講者

本学では毎年夏に「学校図書館司書教諭講習」が開催され、筆者の一人（園屋）が「情報メディアの活用」（30時間）という科目を担当している。その中で、本システムを用いて離島校と交流する実践を行った。この講習は学校図書館の司書教諭の資格を得ようとする者が受講しており、内訳は学生・院生と学校の教職員、および一般である。

従って、この実践では前述の表1のCだけではなく、Bにも該当することになる。そこで、調査結果の分析では、教職員と学生の受け止め方の比較も行った。

(2) 実施日時 2008年8月25日10:30-11:10

(3) 交流の相手校

鹿児島県大和村立名音小学校。本校は筆者らが日頃から研究対象校として交流している、離島の小規模校である（注1）。

(4) 交流学习の目的

この科目では、種々の情報メディアの特性や学校での活用法について学ぶ。その中で情報メディアの一つとして「テレビ会議システム」を扱う。

その活用例として、名音小が他校と行った離島3校間遠隔共同学習（注2）を説明し、さらにそれについての補足やQ&Aを、実際にテレビ会議システムで名音小と結び、名音小の教員との交流学习を体験することを行った。

この交流学习の目的は次の二つである。

①実際にテレビ会議を体験することによって、テレビ会議システムについての理解を深める。

②名音小教員との対話によって、学校間遠隔共同学習についての理解、さらに名音小の教育や離島校の教育についての理解を深める。

### 3-2 交流学习の実際

(1) 交流学习の経過

交流学习の前日と当日に次のように行った。

①前日の講義の中で、テレビ会議システムを利用した交流学习の例として、前述の離島3校間遠隔共同学習を、ビデオで紹介した。

②ビデオ視聴後に受講者は感想や質問を提出した。

③その感想や質問を講義担当者（園屋）がまと

めて、名音小に送付した。（内容は後述の(3)を参照）

④当日あらかじめ予定した時間に交流学习を実施した。名音小側は2名の教員が画面に出て対応した。

⑤交流学习の中では、出された質問を園屋が紹介し、それに対して名音小教員から回答、コメントをもらう、という形をとった。

⑥名音小教員と受講者との間での直接のやりとりもなされた。

⑦名音小との交流学习終了後、受講者に対して調査を行った。

(2) 利用したテレビ会議システム

パソコンにWebカメラ、マイク、スピーカを付け、インターネットを介して行う簡易なものを用いた。テレビ会議用サーバーは琉球大学教育学部のシステムを利用した。

(3) 説明及びやりとりされた内容

前日の講義後に受講者から出された質問をまとめたものは表2の通りである。なお、これは園屋が要点としてまとめたもので、実際に記述された質問文とは異なっている。これらの質問を前日に名音小教員に送付し、その際に名音小教員と園屋が電話でやりとりして打ち合わせを行った。

表2：受講者から出された質問

|   |
|---|
| <p>{質問}</p> <p>Q1：遠隔共同学習のきっかけは？</p> <p>Q2：本番までの準備は？<br/>打ち合わせ期間、連絡方法、事前の準備としてしたこと、留意点</p> <p>Q3：遠隔共同学習による子どもの変容は？<br/>授業への取り組み方の面<br/>コミュニケーション面</p> <p>Q4：遠隔共同学習のとき子どもが「どこか受け身になっていた」とは？</p> <p>Q5：テレビ会議は表情が見えることで、意図がしっかりと相手に伝わったかどうか分かるものなのか？</p> <p>Q6：資料に「遠隔共同学習での発表までのプロセスが、子どもたちのためになった」とあったが、実際どのくらいの時間を費やし</p> |
|---|

たか？

Q 7：テレビ会議後の交流は何かしたか？

Q 8：テレビ会議の活用例としてほかにどのような例があるか？

Q 9：ライブだからこそ伝えられる事例は？

Q10：奄美大島内の学校との遠隔共同学習はしないのか？

Q11：ISDN回線の不便さはないのか？

Q12：複式学級の授業で、Webを利用した授業は行われているか？

Q13：子どもたちが本土の子どもたちと何か違うと感じる点があるか？ あるとすると何に由来すると思うか？

Q14：市街地と比べて奄美大島のへき地でのくらしは大変か？それとも得か？

### 3-3 交流学习についての調査結果

交流学习後に受講者に対して調査を実施したので、その結果を以下に述べる。

#### (1) 調査対象者

この講習の受講者は、学生45名、大学院生10名、学校の教職員24名、一般1名の計80名であったが、学生・院生と教職員の比較を考慮し、以下の分析では一般1名を除いた79名を調査対象者とした。また以下では学生と大学院生を区別せずに、学生55名として分析している。また、「教職員」としたのは、教員、事務職員、図書室担当職員等を一括して表記したからである。

#### (2) テレビ会議の経験

テレビ会議の経験について、次の質問で調べた。

「Q 2. あなたは今までテレビ会議（テレビ電話も含む）を、仕事用、私用に関係なく実際に体験したり、それを使った会議や授業などに参加したりしたことがありますか？」

この回答結果を図2に示す。なお、グラフ中の数値は以下すべて割合（%）を示している。

このように全体としては42%が既に経験していたが、教職員の方がその割合は有意に（5%）高かった。これは、次に述べる「②専用のテレビ会議システムによる方法」の経験者6名のうち、5名が教職員であることから、現場での利用経験があるためと推察される。

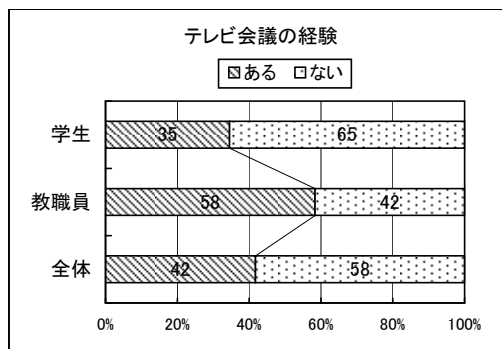


図2：テレビ会議の利用経験

なお、「ある」と答えた者33名に対して、どのような方法のテレビ会議かを尋ねた結果は次の通りである（複数回答可）。

- ①パソコンとインターネットによる方法（15名、45%）
- ②専用のテレビ会議システムによる方法（6名、18%）
- ③携帯のテレビ電話機能（15名、45%）
- ④その他の方法（0）
- ⑤わからない（2名、6%）

#### (3) メディアについての理解

既に述べたように、この交流学习の目的の一つは、実際にテレビ会議を体験することによって、テレビ会議システムについての理解を深めることである。そこで、次の質問をした。

「Q 4. テレビ会議システムを通して、名音小学校の先生と話をしましたが、そのことは、テレビ会議システムという一つのメディアについての理解を深めるのに役立ちましたか？」

この回答結果は図3の通りである。

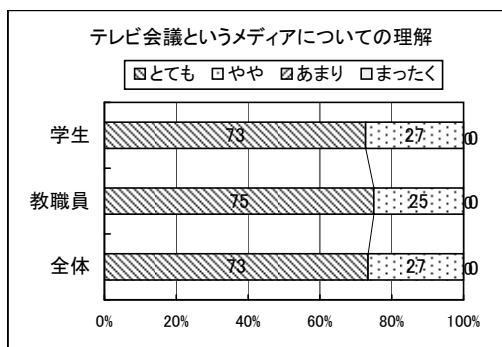


図3：テレビ会議というメディアについての理解

このように、「とても役立つ」が73%、「やや役立つ」が27%で、概ね目的は達せられた。なお、学生と教職員の間には有意な差はなかった。

また、その理由を自由に書いてもらったが、たとえば次のような記述があった（原文のまま掲載）。①～④が学生の、⑤～⑦が教職員の記述である。

①リアルタイムで遠く離れた場所と通じることができて、感動した。表情や、相手の場所の雰囲気なども伝わってきた。

②私は今回初めてテレビ会議システムを利用する様子を実際に見たが、音声だけでなく相手の表情が見れることなど遠方の人とも楽しくコミュニケーションをとれるという利点や一方で、回線が電話などがかかると込みあって音声がとぎれてしまうなどの問題もあるのだということがわかった。

③遠く離れた場にいる相手と顔を合わせるだけでなく、意見交換することができ、文字などではなく、生の声によって相手の意見を聞くことができる。音声や映像を用いることで、文字等で表すよりも多くのことが伝わってきた。そのような利点があるのだと感じたから。

④メディアは相手から情報を得るだけの一方通行でなく、お互いが伝え合うのもあると知れたから。

⑤話やテレビの中で放送される分は理解していたが、実際に体験するのは初めてだったので、楽しかった。表情も案外わかったり、回線が細いことで色々苦労する部分もあったりと、実際、始動にいたるまでには色々な苦労や工夫があったのだろうなあと思った。メディアとして、まだまだ発展途上な部分も感じる。これから期待したい。

⑥テレビ会議システムの実際を見ることで、その様子・雰囲気が分かった。互いの表情を見て話せるなどの即時性や共有感が持てる良さもあるが、音声の遅れや途切れなど回線の問題もあると特性を知ることができた。

⑦遠く離れている場所の人と交流ができるという利点を感じられたと同時に回線によって、声の届きに影響が出てしまうなど、インターネット環境の整備の大切さ(重要性)を感じられた。遠い土

地のことがライブで感じられるというのはとても良いと思った。

このように、テレビ会議システムというメディアの利点と、回線状況によるトラブルなどの欠点が認知され、メディアの理解に役立つことがわかる。

(4) 遠隔共同学習についての理解

この交流学习の第二の目的は、名音小教員との対話によって、学校間遠隔共同学習についての理解を深めることである。これを次のような質問で確かめた。

「Q 5. テレビ会議システムを通して、名音小学校の先生と話をしましたが、そのことは、名音小学校が行っている遠隔共同学習（交流学习）についての理解を深めるのに役立ちましたか？」

この回答結果は図4の通りである。

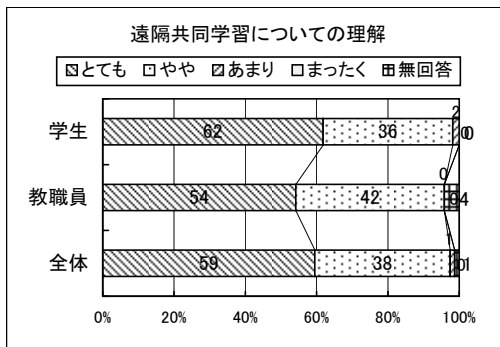


図4：遠隔共同学習についての理解  
(グラフ外の数値は、「まったく」と「無回答」である)

このように全体では、「とても役立つ」が59%、「やや役立つ」が38%、「あまり役立つなかった」が1%で（無回答1%）、概ね役立つことがわかる。この場合も学生と教職員に有意な差はなかった。

この質問についても、その理由を自由に書いてもらったが、たとえば次のような記述があった。①～③が学生の、④～⑥が教職員の記述である。

①自分自身もとてもワクワクしたので、子どもたちだったらもっと喜ぶのではないかと思った。子どもたちの聞く姿勢が変わったという言葉からもその成果がうかがえた。

②打ち合わせから、回線が細いのでどういう工夫をしているか、また、遠隔共同学習の後に子どもたちにどういふ変化があったかなど、さまざまな話を聞くことができたのでとても役立ちました。

③こちらの質問に対して、すぐ答えていただき、またテレビ会議を使って具体的な活動を(パワーポイント、ポスターを見せ合う等)を多く知ることができたから。

④テレビ会議システムを用いての遠隔共同学習を通しての子どもたちの変容を直に聞くことができたし、共同学習を通して授業の組み立てを何度も考える機会が出てくるというのは、教材研究も深まるだろうし、進め方、発問なども変化していきだろうし、わかりやすい授業を作っていくのに、とてもよいことなのではないかと感じた。ライブで日本各地の違いを感じられるというのは、とても良いと思った。

⑤直接、先生から子どもの話を聞く態度、聞く姿勢の変容、のびた点、関心・意欲の面の変容などをおうかがいして、テレビ会議を通じて子どもたちが成長したことがわかった。限られた人とのコミュニケーションだけではなく、色々な学校の友達と交流すること、情報交換することにより、得るものが大きいということがわかった。

⑥・一つの学校ではできないことができるようになることはすばらしいと思う。学校同士がこのような交流をどんどんして高めあえると良いと思った。・授業まで大変な準備が必要だが、得るものが大きいと思った。

このように、名音小の教員から直接話を聞いたことで、遠隔共同学習の教育効果や工夫の実際が良く理解できたことがわかる。特に、上記のうち④の下線部(下線は筆者による)は、教職員ならではの記述であるように思われる。

##### (5) 調査のまとめ

今回の学校図書館司書教諭講習における、名音小との交流学習では、上述のように、筆者の意図を達成することができた。これまでは教育学部と名音小の交流学習は、教育学部の通常の講義において行っていたが、今回はそうではなく、「講習」の中で初めて行った。既に述べたように「講

習」は学生だけではなく、現職教員をも対象としているため、現職教育の意義もある。調査結果にある通り、このような現職教育にも交流学習の効果があることが明らかになった点は、今回の実践の成果である。

また、上述の質問のほかに、「Q6. 今日のように、講義の中でテレビ会議システムを用いて、外部の方の話を聞くことについて、どのように思いますか?」と問うたが、現職教員の自由記述回答には、交流授業の位置づけを指摘した有意義なコメントが多く見受けられた。たとえば、次の二人の記述がそうである。

①実際は話を伺う機会を作ればなおいと思うが、そうはいかないのが現状である。テレビ会議システムを使えば自分たちが聞きたいことを聞きたい時にできるので学習効果も高いと思う。ビデオ教材などは聞くことはできるが、質問は難しい。一方通行の学びより互いに行きかう学びの方が子ども達が思考力をつけていく意味でも効果的であると思う。見学に行くには費用もかかるし、行き帰りの時間も費やすのでそうそう計画を入れられない(ので遠足と併用する。すると、授業とうまく合わない意味のないものになる)活用の価値は大いにあると思った。

②近くの人になら、直接行ってインタビューするなどの活動ができると思うが、遠く離れてしまっていると難しい。そんな場合にはテレビ会議システムを使うことがとても有効だと思う。資料から得られる情報も大切だが、実際に、人との交流を通し、考えを聞く、質問して答えを得るといふ活動は、考えを広げていく上でとても重要なものだと感じる。限られた環境の中から踏み出す、新しい場所を知る、違う土地の人とのコミュニケーションを通して、言葉の違い、環境の違い…等々様々な生きた情報を得ることにつながり、成長につながると思う。

以上のようなことから、今後学校でのテレビ会議システムの活用を進めるには、現職教員にまず交流学習を体験してもらい、その良さを知らうことが大切であることを強く感じた。このことから、本研究の目的である交流促進方策の一つとして、相互支援型交流システムの良さをPRす

ることが挙げられる。

#### 4 大学生と離島校児童との交流学習

本章では表1（第2章）の交流形態のうち、Eについて述べる。すなわち大学での授業において、学生が本システムを通して離島校の児童と交流するという形態である。これまで大学の授業で大学生と離島校教員との交流学習は行っていたが、大学生と児童が直接対話する交流学習は行っておらず、今回が初めてである。

##### 4-1 交流学習の概要

###### (1) 交流学習を行った授業

筆者の一人である園屋が担当の「教育情報処理」の授業において交流学習を行った。この授業は、内容の一つとして教育におけるコンピュータ・インターネットの活用法などを学ぶが、その事例の一つとして、テレビ会議システムを使った交流学習について紹介する。今回の交流学習の前時の授業で、前述の離島3校間遠隔共同学習を紹介したが、本時は交流学習を実際に体験することも兼ねて、(4)に述べる目的の授業を行った。この授業の受講者は4名である。

(2) 実施日時 2009年1月9日11:00-11:40

###### (3) 交流の相手校

前章の交流学習と同じ、鹿児島県大和村立名音小学校の5・6年複式学級。児童2名（5年1名、6年1名）と担任教師が参加した。

###### (4) 交流学習の目的

この交流学習の目的は、次の3つである。

①交流学習を実際に体験することによって、テレビ会議の方法（システム）や特徴を理解する。

②離島の小学生とのコミュニケーションをはかる。

③名音小学校側は、この授業を「キャリア教育」の一つに位置づけているので、それに対して大学生の立場から支援する。

特に今回の受講学生4名のうち3名は、4月から県内の小学校に勤務することが決まっているので、②と③の意義は大きいと考えた。

###### (5) 利用したテレビ会議システム

前章の実践と同様に、パソコンにWebカメラ、

マイク、スピーカを付け、インターネットを介して行う簡易なものを用いた。テレビ会議用サーバーは琉球大学教育学部のシステムを利用した。

##### 4-2 交流学習の実際

###### (1) 交流学習の経過

本時は次のように展開された。

①交流学習の趣旨を確認

②テレビ会議システムで接続

③大学側、名音小学校側のそれぞれの出席者の自己紹介

④名音小児童と学生とのQ&A方式によるやりとり

⑤担任教諭によるまとめ

###### (2) 児童と学生でやりとりされた内容

①学生の小学校の頃の夢と、それを実現するためにどんなことをしていたか？

②学生の今の夢と、それを実現するためにどんな努力をしているか？

③児童の今の夢は何か？

④今している勉強やサークル活動についての質問

⑤離島での生活の様子など

##### 4-3 交流学習の結果

授業後の学生の感想として、次のようなものがあつた。感想の一部をカテゴリ別に分け、原文のまま掲載する。

a. 交流学習を通じた子どもたちとの会話に関して

①今日のように講義を受けながら現場の子どもたちの様子を見たり、その子どもたちがどのようなことを考えているのかを知ることができたりするのは、勉強になると思っている。

②大学、雪など、ふつうのことであっても、名音小の子どもには目新しいものなんだと思う点がたくさん発見できました。「自分が当たり前」であることが、子どもにとっては「新鮮」で、子どもの気持ち、立場に立って、授業なり活動なりを組み立てていけないといけないのだと実感しました。

③名音小学校の子どもたちとテレビ会議ができ

たことが素直に楽しかったです。なかなか離島の学校の子どもたちと関わる機会がなかったので、今日の体験は心に残るものとなりました。少し緊張してうまく離せませんでした。自分の姿や声が伝わっているんだと思えて嬉しかったです。

④テレビ会議システムは、これを通じて授業、というのは少し難しいようにも思いました。うまく意思疎通、やりとりができるのかな、と思いました。しかし、自分の発言がどう聞こえているのか、伝えやすさ、伝わりやすさとは何かなど、コミュニケーションの確認につながることも思いました。

#### b. キャリア教育について

⑤大学という場所についてあまり知らない子どもたちが、実際に大学生から話を聞いて、どのようなのかなのを知るということは、とても有意義なことだと思った。

⑥自分が通ってきた道が、そのまま「キャリア教育」に生かせるのだと思いました。同時に、自分にはもはやあたり前でも、子どもにとっては新鮮で、子どもの気持ち理解が大切だと思いました。

⑦子どもたちから夢について問いかけられ、自分自身の職業観や進路を見つめ直すことができたように感じる。

このように、この交流学习は学生にとっては有用であったことがわかる。

なお、「すごく時間が短くて、あっという間に終わった感じがして、もう少し話してみたかったなと思います。こちらから奄美大島の生活について聞いてみたりもしたら、もっと良く向こうのことが知れたのではと思いました。」という感想もあり、今後も継続する場合、時間配分や進め方を事前に十分検討しておく必要性を感じた。

## 5 研究のまとめ

本論文では、大学と離島校の交流形態のうち、大学での教職員対象の研修講座での交流と、学生と離島校児童との交流の、二つの形態の実践結果について述べた。

冒頭に述べたように、本研究の目的は、相互支援型交流システムを用いた交流促進の方策を立案

することである。本論文で述べた実践とそれ以前に積み重ねた実践から、大学と離島校の交流促進の方策として、表3のようにまとめることができる。

表3：交流促進の方策

|  |
|--|
| ①授業でのICT全般の活用意識を高める。<br>テレビ会議システムの活用についての教員の意識を高めるには、授業でのICT全般の活用の意識を高めることが必要である。                                  |
| ②離島校におけるICT活用促進の啓発<br>啓発法の一つとして、離島において「ICT活用講座」を「出前形式」で実施する。   |
| ③離島校におけるICT活用の支援<br>離島校に出向いて、教員のICT活用を直接支援する。  |
| ④大学と離島校の交流の継続的实践<br>交流を継続して実践し、双方にとっての利点を明らかにする。   |
| ⑤相互支援型交流システムのPR<br>本システムの意義と実践によって明らかにされた利点を大学内や他校にPRし、教員に知ってもらうことによって、交流の輪を広げる。                                   |
| ⑥離島校と専門機関（博物館・歴史資料館等）および離島校間の交流学习の仲介や支援<br>大学が離島校と直接交流するだけではなく、離島校が行う交流学习を支援することで、大学との信頼関係ができ、それが大学との交流促進につながっていく。 |

このうち①～④については、筆者らがこれまでに著した論文等で詳述している通りである。また、⑤については、現在ホームページによるPRを行っている（注3）。⑥については、名音小学校と「維新ふるさと館」（鹿児島市）との交流学习や、名音小学校が加わった前述の鹿児島一沖縄一長崎三県の離島校間遠隔共同学習の支援を筆者らが行ってきた。

表3の一つ一つに述べたことは、特に目新しいことではないかもしれない。しかし、交流促進にはこれらを併行して地道に継続していくことが欠かせない。今後も交流を継続して研究を続けたい



と考えている。

終わりに、本研究にご協力いただいている名音小学校に深甚の謝意を表します。本研究は、日本学術振興会平成19、20年度科学研究費補助金・基盤研究（C）・課題番号19500809「相互支援型交流システムによる離島・へき地校と大学間の「交流促進ノウハウ集」の開発」（研究代表者：園屋高志）の助成を受けたものである。

（注1）名音小学校は、奄美大島の奄美市中心部から車で約40分の、大和村名音に位置する、山と海に囲まれた学校である。小中併設校で、2008年度の小学校児童数は全部で7名、1・2年、3・4年、5・6年の複式3学級の小規模校である。テレビ会議システムの利用について、従前から県教委の指定校として実践していたことが契機となり、筆者らとの共同研究を始めることになったものである。

（注2）ここで紹介した離島3校間遠隔共同学習は、鹿児島大学・長崎大学・琉球大学が共同で実施した、「離島・へき地教育革新への三大学教育学部連携協力事業」（平成17・18年度）の一環として行われたものである。参加校は、名音小学校と久原小学校（長崎県対馬市）、小浜小学校（沖縄県竹富町）で、三大学のICT活用研究グループが学校間を仲介し、支援して行われた。この詳細は、既に報告されている通りである（藤木ほか2008）

（注3）本研究に関するホームページは次の通りである。

[http://www-jc.edu.kagoshima-u.ac.jp/sonoken/kouryuu/ritou\\_kenkyuu1.html](http://www-jc.edu.kagoshima-u.ac.jp/sonoken/kouryuu/ritou_kenkyuu1.html)

#### 【参考文献】

- 園屋高志、関山徹(2004) 離島の教育と大学教育を相互に支援する交流システムに関する研究(2)、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、第14巻、pp.121-129
- 園屋高志、関山徹、河原尚武、吉村和也(2006) 離島と大学の教育を相互に支援する交流システムの活用マニュアルの開発と評価、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、第16巻、pp.91-96

園屋高志、関山徹(2007) 相互支援型交流システムを用いた離島校と大学間の交流促進に関する考察(2)、日本教育工学会研究報告集、JSET07-5、pp.55-60

園屋高志・河原尚武・植村哲郎・関山徹(2008) 相互支援型交流システムを用いた離島校と大学間の交流促進方策に関する研究、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、第18巻、pp.151-161

寺嶋浩介、関山徹、藤木卓、園屋高志、森田裕介(2007) へき地・離島における教師のICT活用への意識、日本教育工学会第23回全国大会講演論文集、pp.729-730

藤木卓、寺嶋浩介、園屋高志、米盛徳市、仲間正浩、森田裕介、関山徹(2008) 三大学の連携による離島の複式学級を結ぶ遠隔共同学習の実践、日本教育工学会論文誌、第31巻、増刊号、pp.137-140